

平成 23 年度「森林生態系保全再生」（野生動物に関する調査）実施報告

平成 23 年度の野生動物に関する調査については植生タイプ別調査として地表性甲虫類調査、地表性小型哺乳類調査を、地域特性把握調査として地表性小型哺乳類調査、両生類・爬虫類調査、昆虫類調査を実施した。

1. 野生動物に関する調査

(1) 植生タイプ別調査

平成 23 年度の調査結果は以下のとおりである。

1) 地表性甲虫類調査

- ・ 6 月、8 月、9 月の年 3 回、食用酢を誘引餌として用いたピットフォールトラップを 7 つの植生タイプの計 14 ヶ所の対照区に設置し、18 種 640 個体が確認された。
- ・ タイプ I（ミヤコザサ草原）では種数・個体数ともに少なく多様性が低かった。
- ・ タイプ VI（ブナースズタケ密）、タイプ VII（ブナースズタケ疎）では柵内対照区の方が柵外対照区より多くの個体数が確認され、その多くはオオクロナガオサムシが占めていた。その原因として秋繁殖型の本種の生活環と関連する土壌動物の増加が考えられる。

2) 地表性小型哺乳類調査

- ・ 6 月、10 月の年 2 回、シャーマントラップ及びピットフォールトラップを設置し、6 月にヒミズ、スミスネズミ、アカネズミ、ヒメネズミの 4 種 57 個体が、10 月には上記 4 種にハタネズミを加えた 5 種 74 個体が確認された。
- ・ 植生タイプ I（ミヤコザサ）では 10 月に既設柵内で 17.8 個体/100TN の多くのハタネズミが確認されたが、柵外では 1 個体も確認されなかった。
- ・ 植生タイプ III（トウヒーコケ疎）では柵内でヒミズ、スミスネズミ、アカネズミ、ヒメネズミの 4 種が、柵外でアカネズミ、ヒメネズミの 2 種が確認された。種数、個体数ともに柵内の方が多かった。
- ・ 植生タイプ IV（トウヒーコケ密）では、ヒミズ、スミスネズミ、アカネズミ、ヒメネズミの 4 種が確認され、6 月、10 月調査ともに個体数も多かった。植生タイプ IV では過年度調査からも多様性が高い傾向がある。
- ・ 植生タイプ V（ブナーミヤコザサ）では、柵内でヒミズ、スミスネズミ、ハタネズミ、アカネズミ、ヒメネズミの 5 種が確認され、柵外ではヒメネズミ 1 種のみが確認された。植生タイプ V では過年度調査から一貫して、柵内の方が種数、個体数ともに多い傾向にある。
- ・ 植生タイプ VII（ブナースズタケ疎）では柵内でヒミズ、柵外でヒメネズミのそれぞれ 1 種が確認された。植生タイプ VII では過年度調査から一貫して、種数、個体数が少ない傾向にある。
- ・ 植生タイプ II（トウヒーミヤコザサ）、及び植生タイプ VI（ブナースズタケ密）では柵内外で顕著な相違は見られなかった。
- ・ 紀伊半島での特異な分布が注目されているヤチネズミについては確認されなかった。
- ・ ハタネズミは過年度には植生タイプ I（ミヤコザサ）及び II（トウヒーミヤコザサ）でのみ確認されていたが、今年度はじめて V（ブナーミヤコザサ）で確認された。

(2) 地域特性把握調査

平成 23 年度の調査結果は以下のとおりである。

1) 地表性小型哺乳類調査

- ・ 植生タイプ別調査と同手法で 6 月、10 月に 14 ヶ所の植生タイプ別対照区と別に 8

地点(のべ 10 地点)で調査を実施し、植生タイプ別調査と同様の 5 種が確認された。

- ・ シントウトガリネズミは既存情報があるものの自然再生事業の開始以来一度も確認されていない。また、本年度調査でも食虫類はヒミズのみが確認されており、過年度調査で記録のあるヒメヒミズ、ジネズミが確認されなかった。地表部を生活空間とするこうした種の生息が確認されないのは、大台ヶ原全体の下層植生の衰退等が影響している可能性が考えられる。

2) 両生類・爬虫類調査

- ・ オオダイガハラサンショウウオの生息状況調査として、6月の夜間に 24 水系にて調査を行い、幼生 419 個体、成体 34 個体が確認された。
- ・ 幼生が確認された水系と確認されなかった水系の比較の結果、確認された水系の方が、川幅が広く、水深が深く、水温が高いという有意差が認められた。
- ・ 両生爬虫類相調査ではナガレヒキガエル、ハコネサンショウウオ、タゴガエル、アカハライモリ、シュレーゲルアオガエルの 5 種の両生類と、ニホンカナヘビ、ニホントカゲの 2 種の爬虫類が確認された。ニホントカゲは本地域からの初めての確認である。

3) 昆虫類調査

- ・ 森林の湿潤さを表す指標となる陸貝を餌とするヒメボタルの生息状況を確認するため、6月～8月の 3 晩、計 4 ヶ所で成虫の調査を実施した。タイプⅦの柵内でのみ生息が確認された。
- ・ 過年度調査からの累計で 7 科 37 属 60 種のハバチ類が確認された。大台ヶ原のハバチ類の特徴として針葉樹を寄主とする希少性の高い木本食の種が多い反面、草本食の種が少なく、ニホンジカによる採食の影響で草本が衰退していることに影響を受けている可能性が高い。
- ・ ネコノメソウ類を食草とする希少種ヒダクチナガハバチが 40 年ぶりに大台ヶ原で確認された。ニホンジカの採食の影響を強く受けているネコノメソウ類は防鹿柵内では回復してきており、防鹿柵の設置により安定的な本種の生息が期待される。